

日本における周作人研究

伊藤 徳也

はじめに

周作人（一八八五—一九六七）が関心を集めるようになってきた。依然として多くはないものの、周作人に関する文章も、ここ数年エッセイに発表されるようになってきた。九一年には専著も出版され、これまでにない反響を呼んだ。いったいなぜ周作人は最近このように関心を集めるようになったのか。おそらくその理由を過不足なく語ることは容易ではない。またそれは本稿の目的でもない。ただ、それを十全に語るためには、まずこうした状況を研究史の上に位置づけることが必要であろう。

研究に自覚的であらうとする時、研究史を追跡するのはむしろ当然である。それは誰もが多かれ少なかれ研究の過程でやってきたことである。本稿は、ただそれになるべく系統的かつ全体的にあとづけようとしたにすぎない。以下、第一節で終戦まで、第二節ではその後『北京苦住庵記』まで、第三節でその後九二年現在まで、と三つの時期に分けて、周作人研究の足跡をたどってゆく。各節ではまず概況をスケッチし、そのあとにやや詳しい解説を加えることとする。

一 終戦まで

この時期のものは、同時代人の目から見た紹介記事や印象記が主で、論考もほとんどが部分的なものかあるいは簡単なものである。周作人の書いたものは、特に三〇年代半ば以降、次々と翻訳されて一般読者に歓迎された。

周作人に関する記事は、彼が中国の新文学運動の旗手として活躍し始めるのとはほぼ同じころから早くも書かれている。特に、『生長する星の群』等「新しき村」の關係の雑誌や、北京で出版されていた邦字誌『北京週報』⁽³⁾は、彼に関する記事を断続的に掲載している。日本人が中国で経営していた漢字紙『順天時報』をめぐって周作人と『順天時報』主筆金崎賢との間で交わされた論争なども、『北京週報』誌上に見ることができる。そうした記事は、主に当時周作人と直接的な交渉をもった人々によるもので、同時代に書かれた記録として貴重である。

周作人が一九三四年の夏（七月二十五日—八月一日）に訪日した時、彼の来日を歓迎して多くの雑誌・新聞が記事を載せている。これは周作人が日本国内の一般の関心を集めた最初である。その際、

八月四日の周作人・徐祖生歡迎会を主催した中国文学研究会の同人は、周作人を本格的な研究対象とした論考をはじめて産み出した。

竹内好は、三〇年代半ばの小品文運動とそれが惹起した文壇内の対立を分析すると同時に、その運動に隠然たる影響力を持った周作人を注意深く考察し⁽⁴⁾、増田渉は、リアリズムを中国の新文学が進むべき正統的文学のありかたと確信する立場から周作人を批判した⁽⁵⁾。とりわけ松枝茂夫は、三六年から四四年までの九年間に六種類の訳本を出し、最も精力的に周作人の翻訳・紹介を行なった⁽⁶⁾。松枝のこの比較体系的な訳業は格別意義深いものであった。周作人の多くの文章は、主に、松枝の書き下し文調の素朴な訳文体⁽⁷⁾を通して、特殊な日中関係の下にあった多くの一般読者に広く読まれたのである。訳本の一冊にも収められている周作人の評伝は⁽⁸⁾、三九年の狙撃事件——周作人が元且自宅で何者かによってピストル狙撃を受けた（がほとんど無傷で済んだ）事件——までの周作人の歩みを詳細にたどった、おそらく当時においては松枝にかなしえなかった成果である。

周作人は狙撃事件の直後、日本占領下における「偽職」就任に踏み切り、四一年には「華北政務委員会」の「教育総督署弁」になる。督弁周作人が、その年に「東亜文化協会」の一行と共に訪日した（四月一〇日—一九日）際、日本の雑誌・新聞はやはり多数の歡迎記事を掲載している。それらの中から浮かびあがってくるのは所謂「日支文化提携」の文脈である。武田泰淳が四三年と四四年に書いた二編のすぐれたエッセイは、周作人の日本文学に対する理解がいかなるものであったかを示唆深く説き明かしているが⁽⁹⁾、いづれも形としては、「日本文芸の大陸進出」あるいは「日支文芸交流」

といったスローガンに沿った話になっている。

なお、四四年には周作人還暦記念文集『周作人先生の事』（方紀生編・光風館）が出版されている。寄稿者の中には、武者小路実篤、谷崎潤一郎、堀口大学、林芙美子、佐藤春夫、あるいは武田泰淳、吉川幸次郎といった名前も見える。

二 終戦から『北京吉住庵記』（七六年—七八年）まで

このおよそ三十年間、中華人民共和国の建国から文化大革命の収束までの期間とはほぼ重なる。この間に出版された周作人の訳本は二冊あるが、戦前の翻訳が再版されることもなく、周作人は以前のように一般読者の関心を集めなくなる。周作人自身は建国後も執筆活動が続いているものの、同時代人として特別注目されることもない。その一方で、戦前にはなかった類の専門的な研究論文がわずかながらも発表され始め、七八年には初めての周作人研究の専著『北京吉住庵記——日中戦争時代の周作人』（木山英雄著／筑摩書房）が出版される。

一九五五年、戦前周作人の翻訳・紹介に尽力した松枝茂夫は、今村志雄と共に『魯迅的故家』の訳本を上梓した。その「解説」⁽¹⁰⁾の中で、周作人の生い立ちから説き起こして、戦時中の周作人が「彼なりに激しく抵抗の努力を続けていた」ことまでを振り返っている。熱のこもった行文の途中に挿まれる分析には、戦前の文章にはなかった明晰さが見られる。松枝の仕事には他に中国古典の翻訳があるが、その中には、戦時中の『模稜集』（郝懿行の随筆を編訳したもの）をはじめ、『思痛記』、『陶庵夢憶』、『笑府』、『陶淵明全

集』等周作人の著作に触発されて翻訳したものが殊の外多い。

松枝と同じく中国文学研究会の同人であった竹内好は、雑誌『世界』の六五年一月号に「周作人から核実験まで」という論説を発表した。その中で竹内は、周作人の支那通批判を紹介しながら、当時寂寞の中に沈んでいた日本の周作人研究の状況に言及している。その要点のひとつは、周作人再評価の提唱である。特にその文学者としての業績が見直されるべきであることを断固とした口調で訴えている。もうひとつの要点は、戦時中に紹介された周作人像が偏向していたという指摘である。竹内は特に、松枝茂夫による周作人像が時局の制限もあって、単純化されていた——周作人の戦闘的批評家としての一面、排日的な一面がさほど紹介されなかった——ことを遺憾とした。

以上の戦前から活躍していた二人の影響を受けて、顕著な成果をあげたのが戦後研究を始めた世代である。新しい世代によって書かれた専門的な研究論文は、竹内提言のころからその後十年ほどの間、年平均約一本程度の割合で発表された(11)。周作人とフォークロア・童話との関係や白樺派特に武者小路実篤との関係をたどったもの(12)、周作人の日本文化論を概観したもの(13)、あるいは当時の中国の左翼文学史観をほぼ踏襲した明快な周作人批判(14)等がある。なかでも、木山英雄の一連の論考は、周作人の思想と文学をトータルにとらえた画期的なものであった。それらはいずれも短い論考でありながら、深い読みにさせられて、今なお周作人論の最高峰たるを失わない。木山は文学者周作人の問題性を次のように概括している。

かれ〔周作人〕のこの道筋自体は、近代的文章の中国における

運命を象徴する一つの場合として、魯迅の場合に劣らぬくらい重要だ。すなわち、文学的自己表現の最も自然で自由な形態と信じた散文を、かえって文学と自己に對する伝統的無拘泥に回歸することによって、持続しえた場合である(15)。

その一連の論考の中で触れられているテーマは非常に幅広い。周作人の文学(文章)論全般、個人主義の運命、伝統回帰の方法、自我のあり方、文体論あるいは文体の変遷、語文問題における態度・主張、士大夫観、儒家を標榜するまでの理論化哲学化、周作人の所謂「自然」、反ロマンチズム、感覚的「唯物論」等々である(16)。

木山の論考の一部は(17)、魯迅と周作人の比較研究としても異彩を放っている。この兄弟については、「二人の裏を見、表をながめて行くうちに共通する精神のしこりに到達し得る」(武田泰淳(18))とか「ある意味ではお互いが相手を影にもつほど本質的に類似している」(竹内好(19))とか評されてきたが、木山はそうした指摘を展覧させて周兄弟の間の「抜群の共通性」を独特の文体で論じている(20)。

また、七八年に『北京苦住庵記——日中戦争時代の周作人』と題して出版された木山の長編の論考は(21)、日中戦争中の周作人を丹念に追跡することによって、「漢奸」問題という重苦しいテーマに真正面から取り組んだ労作である。木山は序文にあたる「縁起」の中にこう記している。

周作人をもっと自由な気持ちで読むためには、私としてはいちどこの問題に正面からかかずらわってみなければならぬように、ずっと感じてきたのだった。

木山はこの中で周作人に対して「できるだけ同情的に」(22)考えよう

とする態度をとっている。それは、周作人をあのような苦境に追い込んだのはあくまでも日本人——われわれ——の側であるという屈折した苦い認識があるからである。そのような態度は、例えば、周作人にとっての「狙撃事件」の意味を分析する箇所にもよく表れている。周作人の名声にとって致命的だったのは「偽職」に就任したことであり、その直接的なきっかけを提供したと考えられるのが「狙撃事件」である。一般の見方とは逆に狙撃を日本側によるテロととった周作人は、むしろこの「狙撃事件」から、「偽職」についても守るべきものは守れそう⁽²⁾だという一種の自信のようなものを得たのではないか、というのが木山の推理である⁽³⁾。「漢奸」問題については、最近中国で、感情的倫理的料弾から客観的科學的研究へ、という方向が一部に現れてきている⁽⁴⁾が、いずれにせよ、この問題が日本人にとって語りにくい問題であることに変わりはない。

「必ずしも英雄的ではなくても、終始自立した一個の精神としてこの窮境を生き抜いた」という周作人の生活を、綿密に「追体験」したこの論者は、現時点の目から見れば補正すべき点もある⁽⁵⁾とはいえ、依然として他を寄せつけぬ価値と魅力を持っている。

ところで木山は、周作人の日本論を集めた訳本『周作人日本文化を語る』(筑摩書房)を七三年に出している。その中には周作人の排目的側面を直に示す文章も収められており、編集は実に周到である。訳にも定評がある。そのあとがきは周作人と日本の関係⁽⁶⁾を述べて簡潔かつ要を得ている。

三 七〇年代後半から一九九二年現在まで

この時期、周作人に関する論文・記事の発表件数は飛躍的に増加

する。特に八〇年代後半からは、コンスタントに毎年三本以上発表されており、これまでにない活況を呈している。多くは、堅実な書誌的調査に基づく緻密な研究である。思想状況の変化だけでなく、新たな史料の公表・出版や中国における調査の自由化といった研究環境の好転がその背景にある⁽⁷⁾。前節で触れた木山英雄『北京苦住庵記』は、香港発の貴重な史料や当時を知る人々に対するインタビューを駆使しており、その意味ではこの時期の研究傾向の先駆的性質を合わせ持つ。また、中国における周作人研究が一九七〇年から再開され⁽⁸⁾、周作人研究においても日中間の交流が生まれる。その一方で、新たな日本語訳本の出版はなく、周作人は依然として一般の関心の埒外にある。ただし、ごく最近出版された周作人研究の専著は専門外の読者の関心を惹起した。

七七年と七八年には新たな世代の研究者によって著訳書目録あるいは年譜が複数発表されている⁽⁹⁾。それらはその後の——特に張菊香・張鉄榮共編の『周作人年譜』と『周作人研究資料』が日本にもたらされるまでの——研究に、資するところ大であった。また、日本で見ることのできない原載誌や関連史料を中国で閲覧あるいは入手してそれをもとに書いた論考や、新たに目にするができるようになった史料を駆使したものが続々と発表された。

前者の代表例としては、①藤井省三「魯迅・周作人における『ネーショ』と文学——『河南』雑誌掲載論文の比較研究」(東方学六二/八一年)、②伊藤徳也「若子の死の周辺——周作人・一九二〇年代から三〇年代へ」(季刊中国一九/八九年)、③松岡俊裕「周作人の短編小説『活孫国』に関する覚書」(中国近代文学研究三/九

一年)等があげられる。①の藤井論文は《河南》所載論文を調査することによって、日本留学時の周作人の文学論・「国民」論を明らかにし、②の伊藤論文は《世界日報》、《華北日報》、周作人の甥の証言、未発表分の日記を材料にして、詳細が知られていなかった伝記中のひとコマを描き出した。③松岡論文は、《笑報》、《叢社叢刊》、《紹興教育会月刊》、《女子世界》等民国初期の雑誌に掲載された周作人の小説や論文を発掘・紹介している。

新しい公開史料を用いた例としては、日記を駆使した倉橋幸彦「文学研究会の成立と周作人」(関西大学・中国文学会紀要/八九年)、書簡をつぎあわせ分析した尾崎文昭「章廷謙という人、彼と周氏兄弟の関係」(明治大学・教養論集二二七/八九年)の他多数ある。

扱われるテーマは本数に比例して多様化し、問題の設定の仕方、切り込み方、まとめ方も様々である。見過ごされてきた五四以前の周作人の文学活動や伝記的事実を掘り起こしたのも、周作人における海外諸作家・諸作品の受容の様相を論じたもの、彼を取り囲んでいた状況を発掘・整理して周作人の当時の言説を「関係」の中に読み直したものの等々。それらの研究論文の多くは緻密かつ堅実である。その代表的な例が尾崎文昭と小川利康の一連の論考である⁽⁹⁾。特に前者の「陳独秀と別れるに到った周作人——一九二二年非基督教運動の中での衝突を中心に——」(日本中国学会報三五/八三年)は、周到な目配りの下に、思想家周作人の中心的な問題点のひとつを的確に折出させている。本山英雄の論考が何編か中国に翻訳・紹介されて彼地の研究者に影響を与えたように、現在の中国知識人の思想的課題に深い理解を示す尾崎のこの論考もまた、翻訳されて中国の学界に波紋を及ぼした⁽¹⁾。

なお、九一年出版の劉岸偉『東洋人の悲哀——周作人と日本』は、いささか異色ながら⁽¹²⁾この時期の最大の収穫である。近世以来の大まかな思想史・文明史を念頭に置きつつ、文人周作人の政治状況に対するひとつの特徴的な処し方を立体的に浮かびあがらせている。

注

(1) それより以前、周作人という名前はあげられていないものの、日本留学中の彼と兄魯迅の活動を伝える記事が、『日本及び日本人』五〇八期の「文芸雑事」欄に載せられている。

藤井省三『日本紹介魯迅文学活動最早の文字』(復旦学報八〇年二期)あるいは「ロシアの影——夏目漱石と魯迅」(平凡社/八五年)第五章「魯迅とアンドレーエフ」(1)「アンドレーエフ文学の衝撃と『域外小説集』」参照。

(2) 周作人は、武者小路実篤の「新しき村」の理想に共鳴して、武者小路を始め村の他の同人等とも親密に交流していた。その交流については、飯塚朗「周作人・小河・新村」(関西大学東西学術研究所紀要八/七五年)、同「新しき村への道——周作人の足跡をたどって」(関西大学東西学術研究所紀要九/七七年)等参照。

(3) 飯倉照平『北京週報』誌上での中国現代文学の紹介について(大安/六七年四号)等参照。

(4) 「最近の中国文学」(文芸/一九三六年二月号)、「現代中国文学の特質」(支那/三七年四月号)等。

(5) 「周作人論」(中国文学月報九/三五年)

(6) 『北京の菓子』(山本書店/三六年)、『周作人随筆集』(改造

社／三八年）、『中国新文学之源流』（文求堂／三九年）、『周作人文芸隨筆抄』（富士房／四〇年）、『瓜豆集』（創元社／四〇年）、『周作人隨筆集・結縁豆』（実業之日本社／四四年）の六種類。

(7) 中国文学研究会の同人である竹内好は、『翻訳時評』（中国文学六九・七〇／四一年）の中で松枝茂夫の訳文を「訓読的」と評している。

(8) 注(6)であげた『周作人文芸隨筆抄』の末尾に収められている。そのもとになったのは「周作人——伝記的素描」及びその補記（中国文学六〇・六一／四〇年）。のちに、ほぼ同じ内容の文章が、「周作人先生のこと」（後出『周作人先生のこと』所収）に採録される。

(9) 「中国と日本文芸」（文芸一一七／四三年）、「周作人と日本文芸」（後出『周作人先生の事』所収）参照。周作人にとって日本文芸は、「おのれの詩情、おのれの喜び、そしてまた、おのれの怒りの場所であった。」と指摘した武田の捉え方は、以来大筋において各論者によって踏襲されている。武田はこれの中でいくつもの例をあげている。谷崎潤一郎、永井荷風、木下左太郎ら「江戸情緒をしのぶ傾向が強かった」作家達、武者小路実篤、志賀直哉、夏目漱石、「俺が春」、「徒然草」等々。

ただし、それらに対する周作人の受け取り方には、武田が指摘した以外にも様々な相があることが、のちに指摘されている。例えば最近では、伊藤徳也『私』という宙吊り装置——周作人の日本語創作』（『魯迅と同時代人』所収／九二年

・汲古書院）が、武田によって直観的に指摘された周作人と志賀直哉との作風の近似を、周作人による日本語創作の意味を問う地点から捉え直している。また、武田が列挙した以外の作家あるいは作品が周作人の中に確実に根をおろしていたことも次第にわかりつつある。例えば、周作人における正岡子規は、木山英雄「正岡子規と魯迅、周作人」（『橋大学・言語文化二〇／八三年』）と謝野晶子は木原葉子「周作人と謝野晶子——『貞操論』・『愛の創作』を中心に」（『東京女子大学・日本文学六八／八七年』）、有島武郎は小川利康「中国語訳・有島武郎『四つの事』をめぐる——『現代日本小説集』所載訳文を中心に」（『大東文化大学紀要（人文科学）三〇／九二年』）によって論じられている。

(10) 松枝茂夫・今村与志雄共訳『魯迅の故家』（筑摩書房／五五年）巻末の「解説」は未署名である。松枝一人の手になるものとは限らないが、少なくとも共同執筆であると推測される。手元の統計によると、六四年から七六年までの十三年間に十四本の論考が発表されている。ただし、その中の二本は飯塚朗によるものである。飯塚は松枝、竹内、武田、増田等とともに中国文学研究会の同人として戦前から活躍した世代に属する。

(12) 周作人とフョークロア・童話との関係を論じたものに、伊藤敬一「周作人と童話」（都立大学人文学報四二／六三年）、飯倉照平「初期の周作人についてのノートⅠ・Ⅱ」（神戸大学文学研究三八・四〇／六六年・六七年）、今村与志雄「魯迅と周作人と柳田国男と」（『現代思想三一四／七五年』）、白樺派特

に武者小路実篤との関係をたどったものに、杉森正弥「武者小路実篤と魯迅・周作人の交流」(北海道教育大学・語学文学七／六九年)、細谷草子「五四新文学の理想と白樺派の人道主義」(野草十六／七二年)等がある。特に飯倉照平論文は、「根底にあつて絶えることのなかった、彼の大家文芸ないしはフォークロアへの関心が、それらの『周作人の幅広い多くの』仕事の根源を支えた、切り離しがたいなにかであつた……」と考え、周作人とフォークロアの関係を單にたどるだけではなく、二〇年代前半における『北京週報』周辺の日本人と彼との交流を発掘するなどして、主に二〇年代後半までの周作人をかなり詳しく多面的に考察したものである。

- (13) 細谷草子「周作人の日本文化論について」(東北大学・集刊東洋学二九／七三年)等。

- (14) 樋口進「周作人試論」(『目加田誠博士還暦記念中国学論集』所収／六四年)等。

- (15) 「実力と文章の関係その他——散文の発達と周氏兄弟」(『現代アジアの革命と法』(上) 所収／六六年)……①。木山の論考に影響を受けて、周作人における近代文学の運命に論及したものに、代田智明「『駱駝草』をめぐる」(アジア出版『駱駝草』解説／八二年)がある。

- (16) 注(15)にあげた①の論文の他、「周作人——思想と文章」(『近代中国の思想と文学』所収／六七年・大安)……②、「莊周韓非の毒」(『橋論叢六九／四／七三年)……③、「文語から口語へ——中国文学の一断面」(『言語三／八／七四年)……④、「語文問題と周作人」(『漢文教室』一一／七四年)……⑤等参照。

- (17) 注(15)の①、注(16)の③、④等参照。

- (18) 「周作人と日本文芸」(前出「周作人先生の事」所収)の中の語。

- (19) 『魯迅』(四四年／日本評論社)の「伝記に関する疑問」の章参照。

- (20) 魯迅と周作人の比較研究ということになると、木山の論考の他には、両者の間の差異を際立たせたものが目立つ。例えば、杉森正弥「武者小路実篤と魯迅・周作人の交流」(北海道教育大学・語学文学七／六九年)、丸尾常喜「阿Q、周作人そして『長毛』について」(『熱風七／七八年』、藤井省三「魯迅・周作人における『ネーション』と文学——『河南』掲載論文の比較研究」(『東方学六二／八一年』)。

- また、両者の比較とも関わって、兄弟間の確執——特にその「不和」——に論及するものも少なくない。代表的なものに、三宅政美『『鬼と猫』・『あひるの悲劇』を書いた魯迅』(富山大学・人文学部紀要創刊号／七七年)、太田辰夫「魯迅と周作人I」(神戸外大論叢二九／三／七八年)、松岡俊裕「魯迅の『罪』とその変容」(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』所収／八六年・汲古書院)、中島長文「道聽塗説——周氏兄弟の場合——」(『風風二六／九一年』)がある。いずれも大胆な推理を提示している。

- (21) この論考のものになったのは、雑誌『思想』の一九七六年一月(六一九)号から翌年二月(六三三)号までの間に一一回連載された「周作人淪陥顛末」である。

- (22) 「松枝茂夫氏を囲んで——紹興、魯迅そして周作人——」

(文学五五—八／八七年)で木山は次のように語っている。「私は周さんにはできるだけ同情的に考えたいわけですよ。結局、日本はもう信用できないというふうに見極めがついたから、安心して漢奸になった。こういう関係じゃないですか。」

(23) 周作人の日頃の発想法を考えあわせれば、このような木山の読みが、強いリアリティを持つこともまた確かである。一方、周作人を狙撃した犯人に関する新しい史料を最近紹介した黄開榮『周作人遇刺事件始末』(魯迅研究月刊九二年八期)は、その解説の中で、「狙撃事件」から「偽職」就任までの周作人を、木山とは対照的に、およそ次のように分析している。「周作人は、日本側によるテロだと口では言っているが、自分でも本当は抗日テロだとわかっていたにちがいない。『偽職』就任を決めかねていた彼は、狙撃に遇ったことで怖くなり一気に足を踏み出して日本側の保護を得ようとしたのである。」

(24) 董炳月『周作人的「附逆」与文化観』(二十一世紀)一三／九二年)は「倫理審判」に対する「科学研究」を提唱している。他にこの傾向を如実に表すものに、陳思和『關於周作人的伝記』(《中国現代文学研究叢刊》九一年三期)がある。

同文は『苦風苦雨說知堂——致鐵理群談周作人的伝記』と改題されて『馬蹄声声碎』(九二年・学林出版社)に収められている。なお、一方では倫理的糾弾に重きを置く論調も依然根強い。例えば、曾鎮南『略釈周作人失節之謎』(《文芸報》九一年一二月二二日)、同『期待着認真的學術論争——從周作

人附逆之「謎」的論争說開去』(《文芸報》九二年七月二五日)等参照。

(25) 様々な細かい史実が明らかにできてきただけでなく、それに伴って木山自身「周作人に関する新史料問題」上、下(文学五五—八、九／八七年)で分析上の若干の補正を加えている。

(26) 「周作人と日本」というテーマを全面的に述べるためには、彼の日本文化論、青年時代の留学を含む「日本」体験、彼と日本文芸との関係以外に、さらに周作人と「日本」との政治的あるいは実地的関係にも触れる必要がある。

(27) この時期以前は、主に香港から新たな史料がもたらされていた。例えば、新しい一次史料として、六〇年代に《知堂乙酉文編》、《過去的工作》、七〇年代前半に、《知堂回想録》、《周作人晚年手札一百封》、《兒童雜事詩》、《周曹通信集》が香港で出ている。主な周作人の文集二十数種の影印本も香港から日本にもたらされている。しかし、《晨報》、《晨報副刊》、《民国日報副刊・覺悟》、《大公報》等の原載紙が続々とリプリントされ、それらに目を通すことが容易になったのは八〇年代以降である。《京報副刊》等重要な出版物であるにもかかわらずリプリントされていないものも数多いが、それらも八〇年代以降は、様々な困難はあるものの、中国の各図書館で調査することが不可能ではなくなりつつある。また、一級の一次史料である周作人日記がまとまった形で公表され始めたのもこの時期である。しかも、八〇年代半ばから後半になると、張菊香・張鉄榮共編による《周作人年譜》(南開大学出

版社／八五年）、《周作人研究資料》（天津人民出版社／八六年）及び岳麓書社から陳子善編《知堂雜詩抄》（八七年）、《知堂集外文・亦報》隨筆》（八八年）、《知堂集外文・四九年以降》（八八年）が続々と出版され、これらの便利な工具書・佚文集によって飛躍的に研究環境の整備が進んだ。尚、周作人日記の公表状況については伊藤徳也「周作人日記のこと——一九二三年七月一七日の項より」（東方一二／一九一年）、「周作人日記」の出版をめぐる——八七／八八・中国の「状況」（中国文芸研究会会報一〇〇／一九一年）参照。

(28) 文化大革命後の中国における周作人研究の状況に関しては、黄開発《新时期周作人研究述評》（《文学評論》九〇年五期）および張鉄榮（清水賢一郎訳）「中国における周作人研究の最新動向とその展望」（中国図書四一二、五一／九二、九三年）参照。

(29) 村田（松岡）俊裕「周作人著訳書目録（稿）」（熱風六／七七年、福田俊昭「周作人作品年譜（初稿）（上）（下）」（野草二〇・二一／七七年・七八年）、村田（松岡）俊裕「周作人作品年譜（稿）」（一九一七）（熱風七／七八年）がある。特に村田（松岡）のものは実に周到に編まれている。

(30) 尾崎の論考には本文にあげたものの他、「周作人の新村提倡とその波紋——五四退潮期の文学状況(I)」（明治大学・教養論集二〇七、二三七／八八年、九一年）があり、小川のものには、「周作人とH・エリス——一九二〇年代を中心に」（早稲田大学大学院・文学研究科紀要別冊一五／八八年）、「五四時期の周作人の文学観——Wブレイク、Lトルストイの受容

を中心に——」（日本中国学会報四二／九〇年）等がある。

(31) 周作人研究者としても名高い舒蕪が、趙京華《尋找精神家園——周作人文化思想与審美追求》（中国人民大学出版社／八九年）に寄せた序文（八八年十一月六日執筆）等を参照されたい。

(32) 比較文学という学科が生んだこの論著は、他の論考にはない視野の広さを持っている。また、その一方で、周作人に関する書誌的基礎研究および分析の繊細さ・堅実さにおいては、この時期の他の論考が持っている好ましい傾向を備えているとはいいたい。そうした点についてこの論著に対し過酷な批判を加えたものに、伊藤徳也「周作人の『文学的生涯の終焉』と『東洋人の悲哀』——劉岸偉『東洋人の悲哀——周作人と日本』について——」（野草四九／九二年）がある。なお、この批判に対して劉岸偉「『東洋人の悲哀——周作人と日本』に関する二、三の説明——伊藤徳也氏に答えて——」（野草五〇／九二年）が反論している。

この論著に対する一般読者の好意的な反応を示すものに、鶴見俊輔の書評（朝日新聞朝刊九一年一〇月六日書評欄）、「現代」九二年一月号の「リレー書評対談」の中の川本三郎の発言、サントリー学芸賞の受賞等がある。

*本稿は、一九九二年一〇月一六日に開催された第二二回「中国現代文学研究者の集い」（於東京学芸大学）における口頭発表を改稿したものである。

一九九三年一月